

春燈



May 2009

5

主宰の句

安立公彦

茂吉忌や野に逍遙の春の雲

露の臺根岸の里のすゑ今に
(子規庵二句)

子規抛りし机上春の日移りゆく

天づたふ入り日を胸に呼子鳥

生誕を汝も言祝ぐや花こぶし



燈下集

○ 中野あぐり

鴛鴦の胸すすみくる山の晴

立春の雀思はぬ近さまで

春の雪止みたる昼を女客

赤松の幹の匂ひや春の雪

草に木に日の斑うごきぬ三月来

○ 小石珠子

灯冴ゆる月命日の供華の白

春の灯や仏と交すあれやこれ

白玉椿己れは己れつらぬかむ

シネラリヤ別きても水を待ちぬたり

そば湯注ぐ朱き湯桶や春の雨

○ 諸戸せつ子

春一番梅を散らせて海へ去る

春煖炉薪くべる子の父似かな

蓮如忌や畏みて聴く御文章

病む友の快癒を禱り雛流す

恙無き身を愛ほしみ青き踏む



○ 井上春子

立春大吉腕大きく回しみる

白梅は楷書一枝も緩ぶなし

絵馬堂のうしろ紅梅濃かりけり

うぐひす餅買ふや街騒ふと途切れ

あたたかや歩み励ます水の音

○ 大嶋 洋子

ちぎり絵の牛の親子や寒明るる
たまさかに使ひし針を納めけり
喪ごころの帽子まぶかや冴返る
白波の碎ける音や鳥雲に
古雛更けて雨音高きかな

○ 太田 具隆

富士隠す雲へ和みて曾我の梅
這ふ梅の幹に昔のことを聴く
千の梅見て来て友が軒の梅
目撃の記憶も遙か二・二六
探す物ひよつこり出でて二月尽

○ 益田 寿美子

一語のスパイス妙に利きたる寒戻り
土雛の金泥おもき灯かげかな
水平線におよぶ鳶の輪啓蟄日
玻璃戸の日・気うとく充てり蕨餅
風光るウォーキングシューズ卵いろ

○ 阿部 泰子

猫柳高層マンション雲の中
三月の雲立ち込めし隅田川
落椿よちよち歩く男の児
三月や上り下りの舟灯す
三月やとつぷり暮れし隅田川

○ 西谷 良樹

春浅し向き定まらぬ風見鶏
残る鴨のこると決めし水に乗る
水の上風滑り来し猫柳
啓蟄や一字読むためルーペ買ふ
ウインドに木の芽の色の揃ひけり

○ 長 浜 徳 三

軒端の梅いまだ開かず実朝忌
無名氏の賀状が籤に当たりけり
按摩機も共に転居や山笑ふ
転居していきなり雛飾りけり
亀鳴くや空の戻らぬ日本橋

○ 綱 徳 女

古代三道いづれを往かむ蝶ふたつ

双蝶や互みに息を計りつつ

谷戸深き愛染堂や草萌ゆる

草萌や台座の朽ちし高射砲

花の精に惹かれ少年闇に消ゆ

○ 末 吉 治 子

信濃路や坂の堅雪子等の声

亡き父と岩海苔買ひし下田港

亡き母の勢ひ残りし白梅ぞ

善福寺川寄りて羽搏つ残る鴨

引鴨の何処で竿に交はらむ

○ 滝 沢 幸 助

啓蟄や過ぎし昔は振向かず

あすありや有りと信じて出し虫

石垣島春の貝殻白しちさし

今日のをはりは眠ることなり花未だし

ひと日の苦勞は一日もて足る春夕焼

○ 細 江 久 美 子

温む水きらりと緋鯉ひるがへる

温む水揺らして絵筆すすぎけり

ゆるやかに棹さす舟や水温む

下総の一茶の足跡青き踏む

富津・木更津波おだやかに春兆す

○ 中 村 嵐 楓 子

雪解やカンパネルラの失せし川

工夫宙に浮き春光を一人占め

初午や卯波の路地の面変り

お好み天ぶらふきのたうにて留めにけり

かげるふや吉凶はこぶ郵便夫

○ 鷹 崎 由 未 子

眉をひく手元に春の立ちにけり

春暁や双眸とちて見ゆるもの

如月や長門の菓子品のぞろへ

論吉忌や春胎動の三田の山

孟宗の肌滑らかに雨水かな

○ 萩原 すみ

枯蔓にがんじがらめの捨小舟

とびとびに水仙の咲く海女の墓

一木にわつと集まる寒鴉

雨粒を払ひて葱を買ひにけり

一本の黙然と立つ大冬木

○ 小張 昭一

誠・廣芝・隆の恩や初句会

生き過ぎと言ふことは無し日向ぼこ

マリーからジョニーへバレンタインの日

実朝忌高浪襲ふ烏帽子岩

金溜める嘶家なんざ亀鳴けり

○ 鈴木 鳳来

佐保姫のいざなふ安房や真砂女の忌

初島も沖ゆく船も霞みけり

四阿に梅の香こもる日暮かな

犬ふぐり脇往還の無縁塚

朱の鳥居百をくぐりて余寒かな

○ 松本 峰春

ぶらさがるだけの鉄棒黄砂降る

杉花粉に狛犬の鼻動いて微

踏むことのもうなし父祖の地の春泥

封緘紙の洋灯の画や春灯

吊し雛風の少しに触れあうて

○ 中野 英伴

つまづきし缶を蹴る身の余寒かな

文を裂く高音の走り冴返る

春の水満てるをんなのいのちかな

指からめ誓ひて春の闇纏ふ

嘘の裏くぐる紅引く余寒かな

○ 木村 傘休

「読書と散歩こそが秘訣」の春コート(卒隆様へ)

あたたかや親しきものを詠ひつぎ(信棟君詩集)

降り止まぬ雨の一日や春炬燵(小坂盛志)

やうやくに日差し見えけり花菜飯

大楠の枝先光る正東風かな

当月集

安立 公彦選



○ 河本由紀子

梅の香の鐘の一打にゆらぎけり

千年大樹よぢれて春日拒みをり

花咲くも師友の縁も神慮かな

改札機の電子音春閑けにけり

五十年のふたりの日々や陽炎へる

○ 石原節子

どの部屋も伊豆の海見ゆ吊し雛

海べりに朝市のたつ春焚火

噴煙の上がる火の山鳥帰る

熔岩の径坂がかりなす山椿

落椿流人の墓の苔むして

○ 永島雅子

一擲は友よ癒えよと豆を撤く

寒明の回廊渡り通夜の席

礼拝堂を漏るる讚美歌ミモザ咲く

早春や花卉園に寄る安房の旅

啓蟄や旅程吐き出すフアクシミリ

○ 徳永辰雄

はろばろと一湾展け春の海

春光や身ぬち射しこむ日矢熱し

一念一步齡刻むや彼岸みち

白木蓮やうからこぞりて花の座に

ゆく鴨や富士な忘れそまた逢はむ

○ 布村松景

画廊出て熱き珈琲街二月

風船の点となりたる雲の端

裏返る絵馬を戻して春一番

窠跡のくづれしままや梅寒し

多喜二忌や固く閉ざしし貝の口

春燈の句

安立 公彦選

書にはさむ葉くれなぬ寒のあけ

千葉 西岡 啓子

波音のささやきに似て椀貝

我が家てふ安らぎにをり春灯

啓蟄の空に屋根葺き替ふる音

瀬田唐橋くぐりて迅し春の水

清水の舞台つつめる霞かな

洛北の雨脚ほそし花菜漬

胎内のごとし春雨闇に聴くは

結び上げて袴短く卒業す

春の水一合の米研ぎにけり

鉛色の母の物指し針供養

方便の嘘さへつけず四月馬鹿

シュークリームの重さ手にあり春の暮

千葉 吉村さよ子

春の渚歌碑のつづきを口ずさむ

うつむきて小石蹴る道ミモザ咲く

かたむける道祖神支へ犬ふぐり

寄居虫や地道に生きて利を追はず

東京 増田 大

帰国子の日本むさぼる春大根

春暁や散歩をねだる犬言葉

春愁や梔子でも動かぬこと多し

空青き工場跡やうまごやし

ひとつだけ分けてもらひぬ露の臺

嫁しし子の雛出さぬ夜の雛あられ

忘れ雪訪ぬる宿の閉ちてをり

探梅行女人結界には入らず

墓碑銘は大戦戦士路の臺

組む腕に罅浅春のモニュメント

野に遊ぶ牛の咀嚼も春めけり

いたはりの妻の工面の粥柱

福島 物江 康平

凜然と梅一輪の孤独かな

友と言ふ宝抱きて卒業す

春一番座敷牢をば解かれけり



余言

安立公彦

作者との交友も永い。変らぬ創作意欲を慶ぶものである。

梅の香の鐘の一打にゆらぎけり

河本由紀子

この梅は咲き満ちた白梅だろう。折から鳴り出す時鐘。その一打に梅の香りが揺らぐ。その揺らぎとともに、梅の花が散りかかるのである。

高速度撮影を見るような、のびやかな風景である。

落椿流人の墓の苔むして

石原 節子

作者はいま、流刑の島の流人の墓の前にしている。苔むす墓に彫られた名などはすでに磨耗して無い。しかしその墓は、かつて一人の流人の死を弔って島民がひそかに祀ったものなのだ。

一般に旅人としては島の風光に視線が行きがちである。しかし流人の墓を詠むことは、その流人の死者としての遙かな日月に対する作者の哀惜の思いであり、挨拶である。

礼拝堂を漏るる讚美歌ミモザ咲く

永島 雅子

「礼拝堂」、「讚美歌」、「ミモザ」、ともに一つのトーンをもって読み手に語りかける。そのトーンを憧憬とする人も、あるいは付き過ぎと評する人もいよう。

しかし、三つの言葉がお互いに手を差し伸べている句であることを見落してはならない。作者にとってはきつと、

白梅は楷書一枝も緩ぶなし

井上 春子

「白梅は楷書」とは見ごとな把握である。白梅の香気、その風姿、その故事、どの一つをとっても百花の魁としての美意識に關けるものはない。句の表現にしても、この上句に対し、「一枝も緩ぶなし」の下句を添え、一句の形をゆるぎなく締めている。

ただ、句を鑑賞する側から見ると、この「楷書」は「楷書の抒情」と言葉を補って味わうべきであろう。そして芭蕉はまさに楷書の抒情作家だった。へ春雨や蓬をのばす艸の道へ、へ八九間空で雨ふる柳かなへ、我がきぬにふしみの桃の掣せよ。どの句も形正しい。さらに掲出句もまさに「楷書の抒情」句と言ってよい。

教会の白壁の壁が忘れられなかったのだろう。

一念一步齡刻むや彼岸みち

徳永 辰雄

「一念往生」はよく聞く言葉だ。「一念五百生」は一念の妄想が五百生の長い生死に亘り報いを受けるとのこと。また「一念三千」は天台宗の究極的真理と聞く。

この句の「一念」は「一步」にかかり、「齡刻むや」にかかる重い言葉だ。また「一步」は千歩に続き、その先には終齡が待つ。それらの全てを支えているのが「一念」だ。折しも彼岸会に向かう「彼岸みち」。煩惱、往生、涅槃、そういうことを静かに考える時でもある。

画廊出て熱き珈琲街二月

布村 松景

画廊の数は、例えば銀座一帯だけでも三、四〇〇店あると聞く。個々の店が好みの作品を展示し、そういう画廊を巡るのは、絵の好きな人には至福の一刻だろう。

その画廊を出て、馴染みの喫茶店で珈琲を喫する。「熱き珈琲」がいい。折から街は二月。道行く人の服装も春を感じる装いとなっている。

山笑ふ母の声なる木霊かな

清水 美子

「山笑ふ」という季語は好きだ。季語が好きということもあるが、その頃の季節が好きである。落葉樹の木々の梢

が潤むように透けている山の景は見ていて飽きない。

作者はいま山路を登りながら木霊を聞いている。その木霊の一つが思いきや亡き母の声のように聞こえてきたのだ。ふり仰ぐ山はまさに「山笑ふ」の景である。その木霊に、作者はしばらくの間立ち止っていたのであろう。

夜の梅黙つて交はず手のぬくみ

篠原 幸子

相聞の句である、と書くとはまどうかも知れないが、相聞は恋愛のみではない。もっと大らかな消息や親しみの感情を述べあうのも相聞である。

この句、「黙つて交はず手のぬくみ」に、何とものびやかなしかも控え目な親愛の情がこもっている。相手はご主人か。静かな懐かしさを感じる句だ。

書にはさむ葉くれなぬ寒のあけ

西岡 啓子

春立つよるこびは、古来詩歌が挙つて詠みとめてきたものである。そしてこの句のように、思いを物に託す句は、現代俳句の一つの表現法と言つてよい。

この句、「葉くれなぬ」がよく効いている。その葉を書にはさむ、ということで作る像も浮かび上がってくる。

作者は昨年秋から、二ヶ所に離れた身内の病氣看護のため、投句を休んでいた。その病状も回復に向かっていると聞く。欠詠のブランクを取り戻すべく精進を期待する。